

1. 見よ。その日が来る。
かまどのように燃えながら。
その日、すべて高ぶる者、すべて悪を行なう者は、わらとなる。
来ようとしているその日は、彼らを焼き尽くし、根も枝も残さない。・・万軍の主は仰せられる。・・
2. しかし、わたしの名を恐れるあなたがたには、義の太陽が上り、その翼には、癒しがある。
あなたがたは外に出て、牛舎の子牛のようにね回る。
3. あなたがたはまた、悪者どもを踏みつける。
彼らは、わたしが事を行なう日に、あなたがたの足の下で灰となるからだ。・・万軍の主は仰せられる。・・
4. あなたがたは、わたしのしもべモーセの律法を記憶せよ。
それは、ホレブで、イスラエル全体のために、わたしが彼に命じたおきてと定めである。
5. 見よ。わたしは、主の大いなる恐ろしい日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。
6. 彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。
それは、わたしが来て、のろいでこの地を打ち滅ぼさないためだ。」

説教

「見よ。その日が来る。かまどのように燃えながら。」(4:1)預言者マラキは、世に到来されるイエスさまを「かまどの火」と表現します。悪魔に惑わされて神を完全に見失っていた人々の所に神ご自身がやって来て、人々の目を眩まし神の愛を見えなくさせている不純物をことごとく焼き尽くし、人々が神の愛をはっきりと知るようになさいます。神は私たちを愛しておられるのに、神の愛を見えなくさせている邪魔なものがこの世にたくさんあります。それで、神は直接来てこの世をきれいに掃除なさいます。その意味で、「かまどの火」であるイエスさまは、全世界を照らす「義の太陽」でもあります(2)。どんな罪人であっても神はその人を愛しておられることを最も強烈に知らせる「義の太陽」です。この神の愛の光に照らされて、人は自分の罪深さを思い知ります。そして、同時に、こんな者でも見捨てず愛してくださっている神の愛を知ります。神の愛を知ることは、罪人を癒し、健全にし、益をもたらします。それで、「子牛のように跳ね回る」ほど元気になって、世に渦巻くあらゆる悪をものともせず、どんな悪にも惑わされずに、「悪者どもを踏みつけ」ます。彼らは無敵で最強の神の民なのです。彼らの無敵さは単に一時的なものではありません。究極・永遠のものです。彼らの無敵さは、やがて最後の終わりの日に最も良く証明されることとなります。なぜなら、彼らは最後の審判の日にも神にさばかれることがないからです。むしろ、「悪者ども」が地獄の火で焼かれた「灰」を「足の下」に「踏みつける」だけです(2-3)。終わりの日の最後の審判は、神を「畏れる」者にとっては、救いとなります。でも、神を蔑み馬鹿にする「高ぶる者」、それ故自分勝手に生きて神を無視し「悪を行う者」にとっては、これ以上ないほどの災いとなります。

それはキリストの再臨によってなされます。キリストの初臨も再臨もその基本的な意味は同じです。すなわち、神の愛を見えなくさせている一切の惑わし(世の邪魔なゴミ)を掃除して、神の愛の光が全世界に一層力強く隅々まで照らすよう、この世をきよめることにあります。そうして、人々が、神の愛を知り、神の愛に満たされて、神と人を愛する世界(神の国・キリストの王国)を建設します。そのために、「かまどの火」「義の太陽」であるイエスさまは世にられました。そして、そのために生き、死んで、復活した後、天にあげられて、今は弟子たちを世に遣わし、この世のゴミ掃除と神の国を建設しておられます。

でも、このイエスさまの働きはいつまでもダラダラと続けられるものではないことが預言者マラキの口を通して明らかにされます。つまり、いつの日かこの働きが終わる時が来るのです。と言うよりは、完成する時が来ます。つまり、この世のあらゆるゴミがすっかりと完全に一掃されて、神の国がこの地上に完成する時が来るのです。その日には、神に敵対する悪魔(サタン)とその手下は永遠の地獄に投げ入れられて、神の栄光がその隅々まで輝きわたります。神の愛の光が人々の頭のとっぺんから足のつま先までを

すっかり照らして、神の子どもたちが神の愛の光を鏡のようにそのまま反映させて曇りなく神の栄光を輝かせます。こうして、世界が神の栄光をいっぱいにあらわす時が来るのです。それがキリストの再臨の日です。世の初めからずっと神は人を愛してこられ、それを預言者の口を通して明らかにし、さらには「終わりの日」のキリストの来臨によっていよいよ明らかにしてこられました。それに対して、今度は神の愛をずっと受け続けてきた人間の側がそれにどう応えてきたかが審判される時が来ます。それがキリストの再臨です。そして、キリストが再臨される時、神の国は完成して世界の歴史は終わりを告げます。こうして、キリストは、御自身でお始めになった神の国をご自身の手でさせます。「万軍の主」がそう言われるのだとマラキは付け加えます(3)。つまり、世界最強のお方である神は、あらゆる妨害を打ち破って神の国を必ず完成させると言うのです。

キリストの再臨に備えて、私たちはどうしたらよいのでしょうか。神は勧めます。「あなたがたは、わたしのしもべモーセの律法を記憶せよ。それは、ホレブで、イスラエル全体のために、わたしが彼に命じたおきてと定めである。」(4)「記憶せよ rk;z"」は「思い出す、忘れない」の意味で、それが強調形で言われます。たとえどんなことがあっても、あるいは何を差し置いても、「モーセの律法」を思い出し、決して忘れてはならない、ということです。世の終わりに際して何が最も重要なことかと言えば、それほど「モーセの律法」が大切だと神は言います。「モーセの律法」は、正確には神がモーセを通して「イスラエル全体のために」命じた「おきてと定め」のことです(4)。内容は、十戒を中心とする多様な戒めとその適用ということになりますが、それを破った際の刑罰と同時に、贖罪の方法まで細かく規定されています。十戒が無ければ、人は自分がどのように罪を犯しているのかわかりません。でも、十戒を知ると、自分がどんなに罪深い者であるかを思い知らされます。そして、自分が行いによっては神の前に義と認められず、ただ神の恵みにより、具体的には、身代わりのいけにえが自分の代わりに神の怒りと呪いを受けて死んでくれることによって神の目に義と認められ罪赦されて神に受け入れられるということを知ります。こうして、ただ神の愛によって救われた喜びと感謝をもって守り行う「おきてと定め」こそが「モーセの律法」です。その本質は神と人を愛することにあります。神と人を愛せよ、これが「モーセの律法」です。お前は無条件で神に愛されているのだから、それを感謝し、喜んで、お前も神と人を愛しなさい、これが「モーセの律法」です。神はこの「モーセの律法」を忘れるなど言われます。神と人を愛さない者たちに、神の愛に心から感謝して、神と人を愛しなさいと言われます。

主の来臨(あるいは再臨)の前に「預言者エリヤをあなたがたに遣わす」と神は言われます(5)。エリヤは、ただひとりで、偶像に満ちたイスラエル国家を丸ごと宗教改革した旧約史上最大の預言者です。直接いきなり主が来られるのではなく、まず預言者が来て、それから主が来られます。それは「わたしが来て、のろいでこの地を打ち滅ぼさないためだ」と言われます(6)。エリヤの働きは、「父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる」ことだと言います。我が子に向いていなかった父の心を子に向けさせ、父に向いていなかった子の心を父に向けさせる、と神は言います。これはどういう意味でしょうか。神と人を愛することがなく、恥ずかしい生き方しかしないので、その子どもは父を尊敬するはずがありません。それで、子の心は父に向いていないと言われます。それに、神と人を愛さないのですから、神と人を馬鹿にして侮り、自分の妻を軽く見て裏切っていたように、もう一人の家族である我が子に対してもこれを軽く見て侮り、我が子に良いものを残そうとか、何より尊い信仰を残そうとか、自分の正しい生き様を残そうとか考えず、勝手に生きています。それで、預言者エリヤは、「父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせ」ます。そして、子々孫々千代に至る祝福の土台を築くのです(6)。

エリヤは、イエスさまの初臨の時にはバプテスマのヨハネでした。でも、再臨の時には、私たちひとりひとりで、神の国を完成させるのはキリストですが、私たちにはその備えができます。主の再臨に備えて、悔い改めを叫びましょう。その叫びは決して空しく終わりません。実がないように見えても、必ずいつか実を結びます。

キリストは予告通り来ました。そして、また来ます。神の国は完成します。敵は灰と化します。

「モーセの律法」を記憶し、神と人を愛して、キリストの再臨と、来るべき新しい時代の備えをしていく者でありたいと思いません。